

序

著者	松木 裕美
雑誌名	世界の日本研究
巻	2020
ページ	4-5
発行年	2021-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1368/00007623/

序

松木裕美

『世界の日本研究』2020 年号は、8 本の論文を取める。まず、スペインとアルメニアという本誌で取り上げられたことのない二国の日本研究についての報告がある。ブライ・グアルネー氏 (Blai Guarné) と岩佐托朗氏 (Iwasa Takuro) の “Japanese Studies in Spain: A Growing Academic Field” は、1990 年代からのスペインにおける日本研究の発展を、関係者への調査に基づいて八つの大学を中心に詳しく描く。アストギク・ホワニシャン氏の「アルメニアにおける日本研究」は、アルメニア語で書かれた日本関連書籍と翻訳書を通して、20 世紀初頭からソビエト連邦時代、そして独立後の現在に至るまでの継続的な日本への関心を追う。

次に、中国、ベトナム、アメリカの研究者の論考は、それぞれの研究分野に特化し、所属研究機関の紹介や研究動向の分析を内容とする。中国からは、李杰玲氏の「中国における江戸時代怪異小説についての研究」が、学位論文などに見られる若手研究者を中心とした怪奇小説・妖怪研究の萌芽を紹介し、その発展のための課題を提示する。潘世聖氏の「近年の中国における日本書の翻訳出版および読書傾向について」は、この二十年の日本語書籍の中国語翻訳の推移と国内の反応を通して、中国の読者が自国の歴史観や価値観を相対化していく過程を描く。孫衛国氏 (Sun Weiguo) の “A Review of China’s Research on the Wanli Korean War in the Past Hundred Years” は、万暦朝鮮の役 (文禄・慶長の役) をめぐる研究関心の変化を、一世紀に渡り詳しくたどる。こちらも、近年の国際的な研究の動きの中で、中国の歴史観の相対化が論点の一つになっている。

ベトナムからは、ゴ・フォン・ラン氏の「ベトナムにおける日本研究——東北アジア研究所の事例」が、研究所の沿革と社会科学分野での日本研究の傾向を紹介し、直面するいくつかの課題を提示する。

そして、アメリカからは、サイモン・パートナー氏 (Simon Partner) が “Edo-Era Women’s History: A Review of Recent Work in English” で、江戸時代の女性史研究における英語圏著者の特徴を分析し、新しいジェンダー観に基づい

たアプローチが歴史学の方法論そのものに変化をもたらしていることを示す。ピーター・ザロー氏 (Peter Zarrow) の “Western-Language Studies of Japanese Heritage” は、英語やフランス語で発表された遺産研究を通して、遺産という概念そのものの曖昧さと、遺産化行為にかかわる権力やアイデンティティの問題を指摘する。

本号では雑誌として新しい取り組みを二つ始めたことにも言及しておきたい。前号から冊子体が廃され、完全にデジタル化・オープンアクセス化されたが、さらに多くの読者に届けることができると願い、本号より日本語と英語の要旨とキーワードを加えた。また、それぞれの論文で紹介されている文献はほとんどが日本語以外で書かれたものであるが、テーマに興味を持った読者がこれらの文献にアクセスしやすいように、本文（日本語か英語）に加えて、原典の言語による表記も記載した。すなわち、入り口を広くしつつ、奥行きも深くすることで、この雑誌が、地域、言語、研究分野を超えた知的交流の一助となることを目指している。

最後に、本号は新型コロナウイルスの感染が広まる中で執筆および編集が行われた。いろいろな制約と仕事が増える中、難しい状況下で原稿を執筆して下さった著者の方々に心からお礼を申し上げる。同じく、遠隔でコミュニケーションの難しい中、校正・校閲作業にご尽力いただいた関係者の方々にも感謝の意を表したい。